



不登校からみた多様な教育のあり方

初等教育学コース 伊藤 万莉捺

(指導教員 眞城 知己)

問題の所在と目的

近年、不登校の児童・生徒の急激な増加が問題となっている。まずは不登校について、その現状と子どもたちの実態について調べ、整理する必要があると考えた。

また、不登校の問題を解決するために、文部科学省をはじめ、地方公共団体や学校現場では様々な工夫を凝らし支援に取り組んでいる。しかし、それでもなお不登校児童生徒の数が増えている現状があることから、「学校」という枠組み、教育の在り方そのものについて捉えなおす必要があるのではないかと考えた。この状況について、加茂(2010)も、「安易に不登校の問題を本人の問題にのみ求めるのではなく、環境、社会的な背景を十分に検討していく必要がある。」と指摘している。本論文では、不登校の問題を、子どもの課題や問題として、その支援や解決方法を考えるのではなく、子どもを取り巻く教育環境に視点を置き、その解決策を考えたい。そのためには、まず、不登校の子どもたちの声から、子どもたちを取り巻く環境の現状について知ることが必要だと考えた。そこから、子どもたちが求めている居場所や、学校以外の学びの場について検討したい。

さらに、昨今、「フリースクール」という言葉をよく聞くように、「学校」以外の学びの場や居場所への関心が高まってきている。子どもたちの学びの場や居場所について考察するうえで、フリースクールなどの多様な教育の在り方について知っておくことが大切である。本論文では、フリースクールが日本で設立されるようになった背景や、その特徴を整理し、具体的な活動例や、そこで活動する子どもたちの様子、実際の声から、「学校」以外の学びの場や居場所が果たしている役割を考えたい。

不登校の増加を背景に、多様な学びの場について、「学校」の中でどう工夫できるかという視点だけでなく、「学校」以外の学びの場も視野に入れ、すべての子どもたちにとっての、教育の在り方や居場所について考えを深めたい。

本研究では、不登校問題の現状やその背景について調査、整理し、子どもの声に耳を傾け、学校教育の枠組みを超えた子どもたちにとっての学びの場や居場所について考察することを目指す。

方法

文献研究を行った。

不登校の実態については、文部科学省の調査から抜粋した。不登校の子ども意識については、先行研究から収集し、子どもの声はニュース記事のインタビューをもとにまとめた。フリースクールについては、先行研究をもとにまとめ、サイニーで論文を収集した。イエナプランについては、主にイエナプランに関する書籍を用いて調査した。これらの情報から、子どもの学びの場や居場所について考察した。

結果

不登校について

不登校児童生徒の数が8年連続で増加しており、不登校の子どもは多くは、学校にも、本来居るはずのない時間帯の家にも自分の居場所が見つけられず、学校に行っていないということから将来への不安や自責感を感じていることが明らかになった。不登校の現状や子どもの実態を踏まえ、平成28年に成立した「義務教育段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する法律」では、「不登校児童生徒が学校以外の場において行う多様で適切な学習活動の重要性」が明記された。

フリースクールについて

日本のフリースクールは、不登校の増加を背景に、不登校の子どもを受け入れる「学校外の居場所」として設立され、その数が増えていったことが明らかになった。また、その理念や活動内容は様々であり、フリースクールは不登校の子ども以外の場にも、色々な役割を担っていると言える。

東京シューレの例からは、その自由さや柔軟性、多様性を受け入れる姿勢をみることができた。子どもたちは、自分で活動内容や時間を決めたり、多様な他者を受け入れる環境の中で自分を表現したり、自分の居場所を見つけたりしていることがわかった。

フリースクールの役割として、「学校」に自分の居場所がないと感じる不登校の子どもが新たな居場所を見つけることができることの他に、多様な教育の在り方を社会に示し、子どもたちの学びの選択肢を増やすことも重要な点であると考えられる。

フリースクールのような多種多様な学びの場が、不登校の子どもたちのための居場所としてだけでなく、全ての子どもにとって、多様な教育を受ける場所や居場所として、「学校」と同じようにその選択肢の一つになることが、子どもの可能性を広げるのではないかと考える。

イエナプラン教育について

イエナプラン教育は、多様な教育方法の一つである。奥村(2020)も指摘するように、一人ひとりの子どもが尊重され、適切な教育を受けることができるようになるために、オランダのイエナプラン教育の在り方から私たちが学べる点は多いと考察する。

イエナプラン教育では、東京シューレと同様に、一人ひとりの個性を尊重し、多様な他者を受け入れること、子どもが自分で決めることを大切にしている。子どもの個性や興味・関心に対して、できるだけ答えるようにする、柔軟さがある。学校や教員が子どもの多様性を認めるだけでなく、子ども同士も、多様な価値観に触れ、多様性を認め合えるようになる。また、教員が上に立ち子どもに指導する立場ではなく、一人の大人として子どもとともに学び、サポートするという役割を担うことで、子どもたちは教員(スタッフ・グループリーダー)と親密に関わりやすくなる。子どもたちにとって、相談しやすい大人になるのではないかと考える。

イエナプラン教育の方法は、現在の日本で先行している義務教育の形とは異なる部分もあるが、大日向小学校の子どもたちの様子から、子どもたちが自発的に学びに取り組んだり、知識をつけて考えを深めたりすることができるとわかる。このことから、いろいろな教育環境や、指導方法、教員の在り方があっていいと考えることができる。大日向小学校は、日本の学校教育の新たな在り方を示し、教育の選択肢を増やしたといえる。

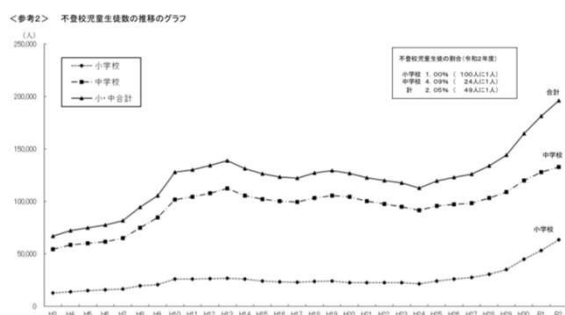
考察

近年、不登校児童生徒の増加が問題視されているが、実際にその数は8年連続で増加していることが明らかになった。そして、不登校の子どもは多くは、自分の居場所が見つけられず、将来への不安感や、不登校への自責感、「学校」への登校義務感を抱いている。

日本では、こうした不登校児童生徒の増加を背景に、多種多様なフリースクールが設立され、様々な学びの場が増えてきた。その役割や活動内容は様々であり、フリースクールの役割は、不登校の子どもたちの支援だけでなく、全ての子どもたちにとっての学びの選択肢を広げることにもつながると考える。しかし、現在の日本では、「学校」が中心にあり、フリースクールなどの学校以外の学びの場は、「学校」と「それ以外」という扱いになっている。フリースクールなどの様々な学びの場が、「学校」と同等に、子どもたちにとって教育を受ける場として一つの選択肢となることで、様々な子どものニーズを包含することができ、不登校の減少や子どもたちの将来への可能性を広げることにつながる。また、イエナプラン教育を取り入れた大日向小学校の例から、フリースクールだけでなく、近年では、海外の教育方法を取り入れた学校が新設されるなど、教育の多様性は広がっていることが明らかになった。

不登校の子どもが増える今、子どもの特徴、個性、興味関心、それぞれのニーズの多様性を包含できる環境が必要である。学校教育から排除される(本人がそのように感じる)子どもを減らすために、そして、全ての子どもたちが、自分の居場所を見つけ、安心して学びに向かうことができるよう、子どもたちを取り巻く教育環境を変化させていくことが求められているのではないだろうか。すべての子どもたちが、多様な学びを自由に「選べる」社会になることが、子どもの可能性を広げることにつながる。と考える。

表1 不登校児童生徒数の推移のグラフ



出典: 文部科学省, 2021, 「令和2年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について」, p.69

表2 不登校の要因

【国公立】小・中学校	不登校児童生徒数	学校に在る状況										家庭に在る状況				本人に在る状況	
		欠席	出席	出席	出席	出席	出席	出席	出席	出席	出席	出席	出席	出席	出席	出席	出席
小学校	63,350	17%	4,259	1,187	2,040	150	11	432	1,121	2,406	9,227	1,027	8,985	29,321	3,096		
中学校	152,777	0.2%	16,571	1,228	8,626	1,426	772	1,061	5,412	3,259	8,166	2,456	14,576	62,555	6,438		
合計	196,127	0.2%	19,820	2,415	10,676	1,587	783	1,514	6,533	5,685	17,391	3,483	23,431	91,886	9,534		

※1 「長期欠席者の状況」で「不登校」と回答した児童生徒全員につき、主たる要因一つを選択。

※2 下段は、不登校児童生徒数に対する割合。

出典: 文部科学省, 2021, 「令和2年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要」, p.17